

インタビュー

日本の美しい風景を大切にする“土木デザイン”とは

構造・デザイン研究室 関 文夫 教授

Fumio Seki | Professor

1963年生まれ 青森県出身

日本大学理工学部土木工学科卒業

専門 | 土木デザイン、構造設計、土木史、災害救助

主な役職 | 土木学会景観・デザイン委員会研究発表小委員長

内閣官房長官室ナショナル・レジリエンス オブザーバー 他

著書 | 土木学会誌叢書7「景観法と土木の仕事」土木学会（2007年 共著）

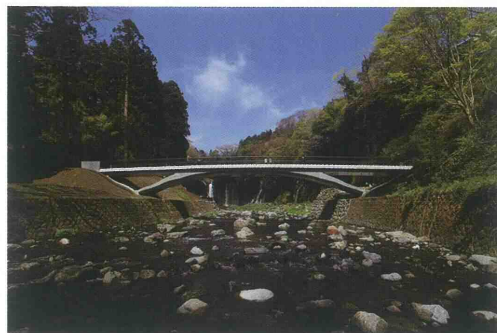
受賞 | グッドデザイン賞経済産業大臣賞金賞（2002年）、土木学会デザイン賞最優秀賞（2011年）



橋や公園、駅前広場、高速道路といった様々な土木施設を扱う土木デザインや環境デザインという分野で、土木工学と自然環境を融合させながら独自のデザイン思想により多くの作品を残されてきた関教授に、最近完成した世界遺産内の橋梁デザインの設計手法を中心に、お話しをお伺いしました。

Q: 世界遺産となった、静岡県富士宮市の白糸の滝に架けられた滝見橋の設計を担当されたそうですが、設計の特徴をお聞かせください。

A: 白糸の滝という環境は、世界遺産だけではなく、国の名勝及び天然記念物の指定を受けていることから、周辺地形の改変が最も少なくなるようなコンパクトな橋となることを目指しました。また、橋梁が白糸の滝の水しぶきを浴びる位置にあるため、ジョイントやシューなどの金属部品を使用せずに済み、維持管理が少なくローコスト管理ができるコンクリートの一体構造（ポータルラーメン）を提案しました（日本初のバランスド扁平アーチ構造）。造形的には、コンクリート構造が最小限に露出して見えるように、陰影と造形のバランスに配慮して緊張感が生まれるように仕立てています。



滝見橋 | 静岡県富士宮市

Q: 土木構造物にデザインという考え方が加わると、どのように変わるのでしょうか。

A: これまでの土木構造物は、頑丈な、強固な、安全なという強度一辺倒なイメージで無骨な印象だったと思います。これからの土木構造物には、自然や周辺環境、地域の文化や歴史、利用性に配慮した視点が必要だと思います。ただ単に造るのではなく、地域へメッセージを贈る文化的な価値を持ち、地域に愛される社会資産となることが、今後さらに求められると思います。

Q: これから土木設計家を目指す若い人へのメッセージをお願いします。

A: 土木の世界はクリエイティブな世界であり、発想の出発点を変える勇気と着眼点が必要だと思います。正面から眺めていたら解決できない課題も、背面から見たら簡単に解決できる場合もあります。設計とはデザインであり、構造計算や施工などの技術、材料やコストなどの知識はもちろん、一番大切なのは美に対する探究心であり、これがなければ本当の設計家とは言えません。美しいものを見て愛おしいと感じる感性を大切にしてください。

上: JR大槻駅前デッキ | 大阪府大槻市
下: 雷電廿六木橋 | 埼玉県秩父市

